禁転載

【人文科学部門　共同研究】

安陽殷墟西北岡商代後期王陵区祭祀坑の研究

溝口　孝司　代表研究者　九州大学大学院比較社会文化研究院　教授
内田　純子　台湾中央研究院歴史語言研究所　副研究員
邱　鴻霖　清華大学（台湾）人類学研究所　副教授
舟橋　京子　九州大学大学院比較社会文化研究院　准教授
冨田　啓貴　九州大学大学院比較社会文化研究院　博士後期課程

本研究は、中国古代商王朝後期の王墓群、安陽殷墟西北岡墓地に存在する「祭祀坑（犠牲坑群）」の研究を通じて、そこで行われた祭祀的犠牲行為の内容の復元とその意味、古代国家の存続において果たした機能について解明することを目指すものであり、以下のことを明らかにした。

1）西北岡墓地を構成する個々の王墓の位置決定には先王、祖先王との関係表示に関する戦略的配慮が介在するとともに、後の中国王権コスモロジーに原型的な東西南北方向への象徴的意味の振り分けがなされており、王陵区東区犠牲坑群は、中でも神聖王的に位置付けられた第21代武丁墓の周囲＝祖先祭祀の場に置いて遂行された祖先王に対する定期的祭祀犠牲行為の所産である。

2）これに対し、大墓1001号（第21代小乙墓推定）東辺に設置された犠牲坑群は、埋葬された王個人を対象とする犠牲祭祀行為であり、そこには、王の家政機関の構成内容が表象されている。

3）Aにみる祖先王に対する大規模かつ定期的・反復的犠牲祭祀行為の遂行、Bにみる犠牲としておそらく王に殉じた家政機関が血縁的出自集団であったこと、これらを総合すると、商代後期王朝／殷王朝は、氏族／クラン的出自集団間、内部に発達した成層構造（円錐クラン）をその基本構造とするものであった可能性が出てくる。言い換えれば商代後期の支配層社会構造は、なお親族組織・原理に依拠するものであった可能性がある。

A～Cにみる統治支配層における血縁原理の残存という〈部族社会〉的要素の残存と、大規模な青銅器生産や広域交易圏の形成に見られる社会の複雑性の発達という、社会システムの構造化を通じて激化したであろう様々な矛盾の隠蔽、自然化といったイデオロギー的機能を、大規模な犠牲行為の反復遂行は果たした可能性がある。そこに、神聖王権（Theocracy）としての後期商王朝の特質の一端が如実にうかがえるのである。

禁転載

【人文科学部門　個人研究】

20世紀初頭イラクのアラビア語文壇と近代化：ユダヤ系知識人による西洋演劇の受容を中心に

天野　　優　　同志社大学大学院神学研究科　博士後期課程
（現　日本学術振興会　特別研究員PD（東京大学））

本研究は20世紀初頭イラクにおけるユダヤ・コミュニティとそのアイデンティティを、文学・文化の側面から考察することを目的とした。その際、主に1920年代バグダードで発行されていた定期刊行物や書籍、発行に携わったユダヤ系知識人の回想録、当時イラク都市部でアラビア語やヘブライ語を用いた文学・文化活動を積極的に牽引したユダヤ系諸組織に関連する文書を中心に扱った。

イラクのユダヤ・コミュニティはムスリムが大多数を占める社会に一定の立場を築いていたが、1948年イスラエル建国を契機に大半がイスラエルへと移住する。本研究は1948年以前、彼らがシオニズムとアラブ民族主義という二つのナショナリズムの影響下にあった時期にシオニスト組織に付随し創設された「ユダヤ文学協会」が、アラビア語に翻訳・翻案された西洋演劇の上演に携わっていた事例などに着目しつつ、ユダヤ世界との接触がユダヤ系知識人の間で独自の近代化・世俗化を促し、時にシオニズム運動による誘因であっても萌芽期にあったアラビア語文学・文化の発展に寄与したという点を示した。相反する要素とみなされがちな「ユダヤ」「アラブ」が文学・文化の領域で相補的に作用した背景を今後も考察していきたい。

宋代の冊封・朝貢
―実態における歴史的意義に注目して―

遠藤　総史　　大阪大学大学院文学研究科文化形態論専攻東洋史学専門分野　博士後期課程

本研究は、近年世界的に議論されている10～13世紀の地域世界史の中に、いかに東南アジアをはじめとした南の海域世界を位置づけていくかという問題意識のもと、宋朝と南の海域世界との関係を中心に、朝貢という中華的理念が持つ地域史的意義を検討するものである。具体的には、日本の東アジア近代史が提唱する「冊封・朝貢体制」の捉え直しに関する議論を参考に、宋代朝貢における上表文の「翻訳」という行為の検討を通して、宋代朝貢の実態としての特徴と、その特徴が地域世界において持つ歴史的意味を分析した。その結果、宋代朝貢には多様な媒介者が「エージェンシー」として参入しており、彼らが「朝貢」という中華的理念を利用にしながら、翻訳などの場を通して朝貢の実体を作り出すことで、宋代朝貢は中国と南の海域世界との間を結ぶインフラとして、ある種の「国際公共財（International public goods）」のように機能していたと結論づけた。

本研究では、2019年6月～8月に台湾・中央研究院に滞在し文献・史料調査を行った他、2019年11月に北京で開催された国際学会「信息溝通与国家秩序国際会議」で口頭発表を行った。最終的に、論文「宋代朝貢與翻譯－宋代朝貢的特徴與其地域史的意義」（『歴史人類學學刊』17-2、2019年、pp. 1–25.）という形で公表するこができた。

禁転載

清代前期盛京地方の法制と社会
――『黒図檔』を中心に

王　天馳　京都大学大学院文学研究科　博士後期課程

『黒図檔』は、清朝の帝室の家政の管理を担う機構である内務府に属する盛京佐領を中心に形成された文書史料である。本研究は、康熙朝『黒図檔』における満洲語裁判文書への考察を通して、包衣と呼ばれる内務府が管理した人々の相続と婚姻を中心とする家族制度を解明し、17世紀の盛京地域社会の一端を窺いたい。

包衣は様々な出自を持ち、激しい社会変動と文化交渉の中で生きていた。康熙朝では、旧来の「満洲」「漢人」のアイデンティティが保たれた場合もあったし、言語面でも多様性を呈している。康熙時代の包衣社会に多様な相続の方式が存在した。満洲人と漢人それぞれの相続慣習はある程度判然としており、いわゆる「典型的な」満洲人の慣習である末子相続制と「典型的な」漢人の慣習である兄弟均分制が包衣社会の中で並行している。一方で満洲人と漢人の間で文化・慣習の融合の兆しも見え、一つの家族の相続の仕方が「典型的な」満洲人の慣習か「典型的な」漢人の慣習でまとまらないことも起きている。

諸修道会間の関連から見る明清中国におけるカトリック教理問答の編纂と出版

王　雯璐　東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻　博士課程
（現　東京大学国際高等研究所・東京カレッジ　特任研究員）

本研究では、従来明清中国のカトリック布教史研究ではあまり注目されていなかった、中国に布教した諸修道会の宣教師によって編纂・出版された教理書に焦点を当てている。具体的に、托鉢修道会や布教聖省が派遣した宣教師による教理書の出版状況を整理し、その上で教理書の編纂・出版をめぐる修道会間の関連性を考察した。

分析の結果として、第一に、教理書をめぐって、修道会間の相互作用が多く確認された。遅れて中国布教に参入した托鉢修道会等の宣教師が教理書を作成した際、彼らはイエズス会士の著作を大いに利用し、主要な内容や神学用語を継承した。第二に、従来「典礼論争」を中心に描き出されてきた修道会間の競争・対立関係は、教理書の編纂事業には、少なくとも明白な形では反映されていない。各修道会は異なる布教方針を掲げていたが、教理書の編纂・出版においては、横断的に存在していた共通認識が統一的かつ安定的な布教用テキストの生成に繋がったと考えられる。

これらの結果によって、中国布教における諸修道会間の関係を、これまで主に捉えられてきた「典礼論争」に代表される競争・対立の側面からだけでなく、相互の影響や共通点の側面からも捉え直すことができる可能性が明らかとなった。また、従来十分に取り上げられていなかったイエズス会以外の修道会による教理書を分析することで、漢訳教理書の全体像を明らかにする手がかりを掴むことができた。

禁転載

西夏国に於ける軍事・社会組織「抄」の研究

大西　啓司　　龍谷大学世界仏教文化研究センター　客員研究員

本研究の目的は、11～13世紀に中国の西北地帯を支配した西夏国に於いて作成された法典を中心とする西夏語史料を読解・分析することによって、西夏国に於ける軍事・社会組織「抄」の実態を明らかにすることである。本研究では、この「抄」について作成年代の異なる法典『天盛旧改正新定禁令』（以下、『天盛』）、『法則』、『亥年新法』に於ける「抄」関連規定に着目し、各法典に於ける「抄」関連の規定と法典間に於ける規定の変遷解明を目指した。

『天盛』の「抄」編成規定、「抄」継承規定を見ると、皇帝の周りを守る宿衛、親衛隊に関して、詳細な規定が存在し、西夏国政府が彼らの「抄」編成、継承について重要視していることが分かった。また、西夏語各種契約文書、『天盛』を分析すると、「抄」は、部族、親族単位から切り離されて、新たに組織されたものというよりも、部族、親族という単位に基づいて構成されていると考えられる。そして、平時にも社会的組織としての機能も有していたことが明らかになった。

1984年インド・デリー暴動（シク教徒虐殺）の生存者の「記憶」と共同体の関係

岡本　優加子　　東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム超域文化科学専攻（文化人類学）　博士後期課程在学

1984年10月31日から約5日間、インドのデリーを中心に発生したシク教徒の虐殺には、当時の政権与党らが加担しており、現在まで犠牲者追悼式典とともに抗議活動が継続して行われている。本研究は、デリー虐殺の追悼式典で語られる「共同体」の記憶と被害者個人の暴動に関する記憶の特徴や差異を明らかにした。例えば、エリート層による式典の演説では虐殺死を政治的あるいは宗教的に有意味化しようとするのに対し、犠牲者遺族は家族の死への理解不能さや無意味さを抱えたままであることや、「勇敢な」シク教徒が強調される一方で教義を捨てて生き延びた「勇敢ではない」シク教徒の記憶や存在が「共同体」の記憶に含まれていないことなどである。

こうした調査と分析で、演説を行うエリート層のみなす「共同体」に必ずしもデリー虐殺の被害者全体が含まれていないこと、そして包摂/排除される人々の実際には多様な想起と生の在り方を見た。現在はローカルな人々の語りに存在する出身地域やカーストによる差別化に着目し、ローカルな視点からの「我々」「共同体」の考察を目指している。

禁転載

清代黒龍江水師営の成立と展開

祁　今馨　早稲田大学文学研究科　博士後期課程

本研究は、17世紀後半以降の清露境紛争において、清朝がロシアへの対抗策として黒龍江に設立した水軍組織である水師営、及びそこから分化した八旗漢軍に焦点を当て、その成立過程と相互関係を明らかにした上で、漢人系住民の視点から清代黒龍江地域社会の一側面を描き出すことを目的とする。

近年では、清朝史研究における満洲語史料の利用は一般的な手法になっているにもかかわらず、水師営に関しては、これまでほとんど利用されてこなかった。本研究は、この史料活用状況に鑑みて、北京第一歴史档案館を訪れ「黒龍江将軍衙門檔案」などの満洲語で記録された同時代史料を調査した。その上で、水師営の全貌及びそれを取り巻く地理的環境への理解を深めるため、黒龍江水師営が設けられた吉林・フラン・チチハル・嫩江・黒河の関連史跡を探訪して、水師営や漢軍の後裔に聞き取り調査を行った。

その結果、黒龍江漢軍について、清朝が熟練した「鳥槍人」や「砲手」を含む一部の「水手」を水師営から分離し、火力専門部隊に転換させたことを実証的に考察した。さらに、一部の水手は漢軍になったものの、清末まで水手の管理にあたる水師営官を続けたことによって、両者の一体化した関係が形作られていたことを明らかにした。

「満洲」における日本の綿羊改良事業の新中国での継承・断絶問題の解明

靳　巍　大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター　博士課程（現　研究員）

家畜の品種改良は、牧畜政策において「数より質」を重んじる今の中国で大いに奨励されている事業である。新中国建国前における綿羊の品種改良に絞って言うと、主に日本・ロシア（旧ソ連）・あるいは民国政府自身が実施したものに分かれる。このなか、日本側の実施した綿羊改良事業は、規模・資金や技術などにおいて、一番優れていた。しかし、既存の研究は、帝国日本の原材料自給政策の影響を強く受けていた1910年代から敗戦までの「満洲」における日本政府主導の綿羊改良事業を考察してきた。つまり、これらの研究は、中華民国時代（1912年―1949年）に焦点を絞り、新中国建国以降の綿羊改良事業の事情について殆ど検討されていなかった。

本研究は、「満洲」における帝国日本の綿羊改良事業に注目しつつ、新中国期当該地域において飼育されていたメリノー改良種の「オーハン細毛羊」と「東北細毛羊」の起源に触れる。そして「オーハン細毛羊」と「東北細毛羊」に関する史料読解の結果、新中国建国以前東北地域で帝国日本によって実施されていた綿羊改良事業が、少なくとも意識・技術・施設などの点において、新中国建国以降の綿羊改良事業に継承されたことを実証した。

禁転載

アジアにおける科学観の認識に関する研究
―理工系人材の倫理・哲学の変容に着目して―

黒田　友貴　　静岡大学大学院　自然科学系教育部（創造科学技術大学院）情報科学専攻　博士課程
（現 静岡大学大学院創造科学技術研究部　特任助教）

科学技術いわゆるSTEM（Science、Technology、Engineering、Mathematics）分野の人材の重要性は世界的に高まっている。同時に、その専門性の高まりにあわせて、求められる汎用的能力の養成も重要視されている。本研究では、アジア各国（シンガポール共和国/タイ王国/日本）の高等教育機関で学ぶ理工系人材のもつ科学観につながる、カリキュラムなどを対象に検討した。

COVID-19の感染拡大により、当初の研究計画を大きく変更することになったが、教職員を対象としたインタビュー調査などの結果から、シンガポールやタイでは米国のNGSSをはじめとする諸外国のスタンダードや教育活動の現地化がみられ、直接言及されているかどうかという差はあるものの、Nature of Scienceを重視して教育活動を展開していることが確認された。一方で、個別単元などが設定されていない日本では、科学に対する評価が非常に低く、それに応じて、STEM人材にとって倫理観は重要ではないという認識が広く生まれている可能性が示唆された。今後は、受講学生を対象とした調査を幅広く展開し、より具体的な科学観と倫理や哲学の養成プロセスを検証していきたい。

フルンボイル地域におけるモンゴル系サブグループの民族衣装の文化人類学的研究

郭布勒（ごぶる）　索麗姫（そるやー）　　東京外国語大学大学院総合国際学研究科　博士課程

婚姻儀礼は重要な通過儀礼の一つであり、その儀礼のなかで婚姻関係と結び付いたモノの交換が注目される。モノ交換は普遍的な社会文化現象である。本研究は父系親族組織を特徴する中国シニヘー（錫尼河）側に居住するモンゴル民族ブリヤートサブグループの婚姻儀礼を事例に、その親族関係、姻族関係で結び付いたネットワークと民族衣装の関係について検討する。フィールドワーク調査で得られた成果に基づいて、婚姻儀礼における結納品、持参品、婚資、お返しなどを関与観察、インタビューしたうえで分析し、検討した。また、ブリヤート人の婚姻儀礼におけるお祝い金とプレゼントの交換現象についても分析した。ブリヤート人のプレゼントは交換、互酬の機能を担っており、社会的人間関係を維持、改善することにおいても意味がある。シニヘー・バローンソムの婚姻儀礼における結婚側の主人と客の間で行われるプレゼントの交換、いわゆるお祝い金とお返しについての考察から、ブリヤート人のモノの交換は互酬性を示している。

禁転載

冷戦期東アジアにおける国家暴力：韓国・光州事件とアメリカ

佐藤　雪絵　　早稲田大学大学院政治学研究科　博士課程
（現　早稲田大学大学院政治学研究科　博士課程／日本学術振興会　特別研究員（DC2））

本研究の目的は、冷戦期の東アジアにおいて、国家権力による暴力がいかなるメカニズムで行使されたのかを、とくに東アジアとアメリカとの関係に着目して明らかにすることである。本研究ではその事例として、光州事件をあつかった。光州事件とは、1980年に、韓国の地方都市・光州で起こった民主化運動を、権力側が武力を用いて鎮圧した事件である。この光州事件を主題に、これまで多くの研究者が学術的研究に取り組んできたが、アメリカの関与については、十分に検証されてこなかった。

上述の目的を達成するため、助成期間には、三度の海外史料調査を実施した。調査はおもに、アメリカ国立公文書館で行った。さらに、日本や韓国の外交文書なども用いることで、マルチ・アーカイヴァルな実証分析をおこなった。収集した史料からは、在韓アメリカ大使館が、光州事件当時、韓国の政治的な安定を取り戻すことを最優先とし、そのためであれば米韓連合指令部の統制下にあった部隊を活用することをも容認していたことがうかがえた。

今後は、これまでに収集した史料の分析を継続するとともに、分析対象とする期間やアクターをさらに広く設定したうえで追加史料調査を実施し、光州事件の諸相をより立体的かつ包括的に研究していきたい。

GISを用いた古代スリランカの水利施設築造の地理的条件の解明

鈴木　慎也　　東京工業高等専門学校一般教育科（人文系）　助教

本研究では未知の水利施設の分布予測の実現に向け、地理情報システム（GIS）を用いて、ソロウワ（石組みの樋門遺構）を伴う貯水池と集水域との関係性の解明を試みた。

ソロウワが確認されている17の貯水池について、GISを用いた水文分析を行い、それぞれの集水域を算出した。その結果、平均年間降水量が1000 ～ 1500mmの地域では、集水域16km^2、1500 ～ 2000mmの地域では集水域6.35km^{2}がそれぞれ最小値であることが明らかとなった。また、年間降水量が多い地域ほど、集水域の小さい貯水池にソロウワが見られるという傾向を観取することができた。本研究により、未知の水利施設の分布予測のためには、年間降水量1000 ～ 1500mm地域では集水域16km^{2}以上、年間降水量1500 ～ 2000mmの地域では集水域6.35km^{2}以上で、地形データ上で堤防の痕跡が確認されるポイントを重点的に調査することが、効果的である可能性が高いことが明らかとなった。今後は、本研究の成果を基に、実際に現地調査を行うことで、その有用性について検証していきたい。

禁転載

中央アナトリア、銅石器–前期青銅器時代の考古学的再評価

須藤　寛史　　岡山市立オリエント美術館　副主査学芸員

中央アナトリアは、新石器時代と中期青銅器時代に大きな発展を見せるが、その間の銅石器時代–前期青銅器時代については不明な点が多い。カイセリやクルシェヒルで行われた遺跡踏査採取資料を検討し、当該地域の物質文化の位置づけを試みた。

西アジアのレヴァント地方や南東アナトリアの紀元前3千年紀に、ムギ刈りやムギワラの粉砕の刃として使用された良質のフリント製石刃「カナアン石刃」が広く流通する。この石刃を、中央アナトリア、キュルテペ遺跡の発掘資料中に発見した。これまでの分布範囲を大きく逸脱する例であり、前期青銅器時代の地域間交流を議論する新たな資料を提示することができた。

2008–13年にカイセリ県で遺跡踏査をした際、銅石器時代と思われるが十分に位置付けられなかった独特の彩文土器を見つけていた。カイセリの東、クルシェヒルにあるアナトリア考古学研究所の踏査資料中に、それとよく似た彩文土器を発見した。今後、このタイプの土器を追求し、銅石器時代中央アナトリアの物質文化の把握に貢献したい。

ポスト・モンゴル期イランにおけるメシアニズムの諸相：ファドルッラー・アスタラーバーディーのメシア自称論理

角田　哲朗　　京都大学大学院文学研究科　博士後期課程

本研究は、ポスト・モンゴル期イランにおいてメシア主義的運動を展開したフルーフィー教団の著作の分析に基づいて、名祖ファドルッラーとその信奉者らが擁したメシアニズムを検討した。ファズルッラーが創始したフルーフィー教団は多数の著作を残している点に特徴があるが、その殆どは未出版の状態にある。そこで報告者はイランおよびトルコにおいて資料収集を行い、31作品18点の写本を入手した。

それらの写本史料に基づいて得られた知見は以下の用にまとめられる。ファドルッラーが自身の夢の解釈を通じてマフディー（イスラームにおけるメシア）を自認したことは彼の日記から確認できる。しかし、そうした自己主張は彼の教義書群には明言されておらず、おそらくは口伝の形で教団内で保持された。このことは、彼の孫弟子が残した手紙に記された論争から傍証される。また、ファドルッラーが生前にマフディーとして救済をなしえなかったという事実については、彼の直弟子の著作では、伝承にあるマフディー像を穏健化することで合理化された。その一方で、早くとも孫弟子世代の著作では、ファドルッラーは神であるとまで称揚された。これらの知見は、今回入手した写本の一部に基づく暫定的なものである。引き続き調査を進めて、更なる検証を進めたい。

禁転載

読音統一会と近代中国の国語運動

陳　　希　　東京大学大学院総合文化研究科　博士課程

読音統一会は中華民国成立の直後、1913年に北京で開かれた国語関係の全国的規模の会議である。これは中国史上において初めて表音文字を議論の対象とした正式の会議で、漢字の音を表記するための注音字母を作り出した点に、時代を画する意義がある。また、それは清末に盛んになった表音文字運動の到達点であると同時に、民国になって本格化する国語創出運動の出発点でもある。本研究では、読音統一会に現れた論争に着目し、近代中国の国語運動における二つの国語思想を考察したものである。

得られた結果は以下のとおりである。1）読音統一会にあらわれた論争は従来の「南北感情論」というよりも、国語をめぐる思想的な差異に由来することを明らかにした。2）王照に代表される国語思想は王照に代表される「国語」観は「白話教育」から出発し、現にある最も通行力の強い北京語を国語の基準としている。3）呉稚暉に代表される「国語」観は中国の方言的差異の大きさを考慮し、平等という観点から、古今南北の漢字の読音を参考にして国音を審査決定し、言語改良を経て国語が形成されるのを待つべきだと主張している。4）この二つの国語思想は近代中国が国語という制度を創設するにあたって直面する二つの側面を反映し、その後の国語運動にも反復・再演されており、近代中国の国語運動に多大な影響を与えていた。

潜伏キリシタン遺物白磁製マリア観音像の制作地と輸入経路について

原　　千夏　　東京藝術大学大学院美術研究科　博士課程

本研究は、潜伏キリシタン遺物白磁製マリア観音像について、日本国内に現存する作例の集成を行い、制作地と輸入経路を明らかにすることを目的とした。マリア観音像は、潜伏キリシタン信者によって聖母マリアとして信仰されていた観音菩薩像のことで、現在は東京国立博物館の所蔵品のみ「マリア観音像」と呼称される。一方、日本国内に点在する作例について、包括的に記録した資料はなかった。このため、白磁製マリア観音像に関する情報アーカイブの作成と、美術史、文献史学による基礎研究を行う。

助成期間中に、国内8都道府県の博物館や寺社が所有する作例を確認し、撮影が許可された場所では8方向＋底面の画像データを収集した。COVID19の影響により、中国や国内島嶼部の渡航は延期となったが、文献調査を進めた。中国・福建省徳化窯で生産された観音菩薩像は、黄檗宗の僧侶とともに中国・泉州港から伝来したものと、ヨーロッパ向けの貿易陶磁として伝わったものがある。日本国内では三川内焼（平戸焼）でも白磁の観音菩薩像が製造されており、その一部は「マリア観音像」として信者が持ち伝えたと考えられる。今後も引き続き調査を進め、マリア観音像の文化的価値を示したい。

禁転載

中央アジアにおける紐状織物制作の現状を探る
～ウズベキスタンのカード織りについて

福田　浩子　　広島県立美術館学芸課　学芸課長

ウズベキスタンをはじめ、中央アジア各地ではさまざまな紐状織物や紐状組物が作られ、使用されてきたが、染織品の一部でしかないために記録がほぼなく、専門家の間でもあまり認識されていないのが現状である。今回は中央アジア、とくにウズベキスタンで行われている紐状織物を追いかけた。

19世紀から20世紀初頭の民族衣装の中には、経糸で模様を織りながら、緯糸で衣装の縁に縫いつけた作例が見られる。この織物あるいは装飾の制作の現場を見つけ、技法をつぶさに観察し、明らかにすることは目的のひとつではあったが、残念ながらめぐりあうことは叶わなかった。推測するにこの古い技法はすでに廃れているのではないか。ソビエト連邦にも中国にも属さず、より古来の文化慣習を残すアフガニスタン北部の高齢の人々の中には、まだこの技法で制作できる人が残っているらしいと聞いた。アフガニスタンで使われているという道具は、上述の経糸保持を行う指の代わりをするもののようである。治安の問題はあるが、機会があればアフガニスタンで古い染織技術を探してみたいと思う。

一方で2つ穴のカードを綜絖にするカード織りの織り手に出会い、現代ウズベキスタンで作られているカード織りの例を調査し、注文から制作に至る流れも聞き取ることができた。

植民地朝鮮における産婆と墓地
―「出生と死亡の近代化」をめぐる衛生政策と日常生活―

扈　　素妍　　京都大学大学院文学研究科　博士課程

本研究の目的は、植民地朝鮮における産婆制度と墓地制度を、法令やそれらを取り巻くメディアの言説の検討を通じて、植民地の日常を規律化した生権力の有り様を考察することである。

まず、産婆制度については次の点が確認できた。朝鮮伝統の助産役と担っていた「産救安」などと呼ばれた家族・親戚の女性もしくは近隣の老婆が存在していたが、植民地当局と在朝の専門家たちはメディアを利用して、朝鮮の風習を野蛮に位置付けていた。それに加えて総督府は至急な産婆普及を唱えつつも、産婆育成の主な対象は日本人であった。

一方、墓地制度においても、祖先の墓地を所有地の山に設ける風習があった朝鮮人側は受け入れず、迷信や宗教による風習との葛藤があり、結局は規則を修正し、また、日本内地より厳しい罰則を設けて実行したことを明らかにした。

以上を踏まえると、植民地朝鮮においては衛生制度の設置や中間エージェントの活動による生権力の構築は、文明的でより衛生的な制度として産婆制度及び墓地制度の宣伝・強化、また風習の駆逐などの規範化を進めた。ところが、近代都市の形成という空間の位階化と公教育の普及遅延などを伴って、都市空間ではある程度正常化したが、それ以外の地域では元来の風習からヘゲモニーを奪うことには失敗したと評価できる。

禁転載

韓国人画家の海外進出と伝統表象
―金煥基とアンフォルメル新世代の比較から

松岡　とも子　　総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻　博士後期課程
（現　国立民族学博物館外来研究員）

本課題は韓国の代表的な油彩画家、金煥基（キム・ファンギ1913–1974）の1960年代以降のニューヨーク移住期に焦点を当て、金昌烈（キム・チャンヨル1929–）ら新世代の画家との比較から彼の渡米期の伝統表象を考察するものである。

COVID19の影響により一部の調査が叶わなかったものの、ニューヨーク期約10年分の日記を柱に、現地踏査と国内外での文献収集によって日記内の固有名詞やイニシャル、散文的に示された美術館や画廊の展評などの具体的内容を特定し、生活にも困窮していた渡米期の彼の活動の実態を明らかにすることができた。

新世代の抽象画家が欧米においても共感可能な「東洋的」コンセプトを伝え海外進出に成功していたのとは異なり、金煥基はニューヨークの現代美術の潮流に沿わず、ドメスティックと言えるほど韓国の文化芸術や同世代の文学者の詩文学を制作の拠り所とし続けた。しかしそれこそが植民地期と南北分断を経験した金煥基が朝鮮の知識人として守り続けようとした独自の同時代文化の文脈であり、長く朝鮮の文化を象徴するモチーフを描き続けて来た彼の変わらぬ制作動機であったと考えられる。

東アジア仏教における教学的な国際交流の研究
―「唐決」を中心に―

村上　明也　　龍谷大学アジア仏教文化研究センター　リサーチアシスタント
（現　龍谷大学世界仏教文化研究センター　客員研究員）

従来、仏教の伝来や国際交流については、「仏法東漸」という言葉に代表されるように、インド→中国→日本という一方向的なかたちで語られることが多かった。しかし近時、東アジア仏教思想研究の進展もさることながら、歴史学、とりわけ対外交流史の研究が発展したことにより、東アジア仏教の国際的な相互交流の実態が明らかになってきている。

本研究は、日本から中国に送付された仏教教義に関する質問状である「唐決」のなかでも、源信（942–1017）が問い、知礼（960–1028）が答えた『答日本国師二十七問』を日中両国における教学的な国際交流の顕著な素材として再評価したものである。これまでの研究では、叡山浄土教史上、もっとも著名な『往生要集』にのみ注目が集まったためか、宋地へ送られた源信のその他の著作に関する検討があまり行なわれてこなかった。けれども、『答日本国師二十七問』は、知礼の教学に影響を与えただけでなく、その後の宋代天台諸師の著作にも引用されていることが判明してきたのである。そればかりか、『答日本国師二十七問』をめぐる山家派の知礼や後山外派の従義（1042–1091）の見解は、入宋僧（おそらく栄西［1141–1215］）を介して日本の叡山に伝えられ、証真（1131–1220の間に収まる学僧）によって議論が深められていく。このように本研究では、『答日本国師二十七問』の内容が中国天台や日本天台の新たな教義的展開を促す一素材になったことを明らかにしている。

禁転載

モンゴル国初発見突厥壁画墓の三次元記録とデジタル展示

山口　欧志　　独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター　研究員

モンゴル国内で初めて発見された突厥時代の壁画墓から出土した遺物を対象に、三次元記録を実施した。方法は、写真計測（フォトグラメトリ）の一種であるSfM-MVS（Structure from Motion and Multi-view Stereo）を用いた。現地調査は、新型コロナウイルス禍のためモンゴル国内の共同研究者グループに写真計測の技術普及を予め進め、彼らがおこなった。

その結果、主要な遺物のうち40点の詳細な三次元モデルを構築することができた。これらの三次元モデルはコンピューター上で自由に回転・拡大して閲覧できるほか、大きさや長さなどを測ることができる。また、詳細な三次元モデルのため、製作技術に関わる細かな調整の痕跡などを確認することができた。その痕跡などから、表情や服装の意匠一つ一つを丁寧に製作しているもの、型取りによって規格性高く製作しているものなど、俑の種類によって製作工程に違いなどがある可能性を指摘できた。遺物の三次元モデルのインターネット上の公開や企画展については、移管先となった新たな資料収蔵・管理機関と具体的な計画の細部を調整している。

※所属、役職は申請時、（　）内は2020年7月報告書提出時